

矢切の渡し

鬼澤 結花

私は、矢切の渡しに行つて船で江戸川を往復しました。

矢切の渡しは松戸市下矢切と東京都柴又を往復する渡しでその始まりは約三百八十年前

江戸時代初期にさかのぼります。

当時、江戸への出入は非常に強い規則のもとにおかれており、関所やぶりは、江戸川の下

岸に田畑をもつ農民は、その耕作のため関所の渡しを通らず農民特権として自田に渡船で行くことができました。これが矢切の渡しの始まりで、農民渡船といわれるものです。

明治以降は、地元民の足として、また自然を愛する人々の散歩コースとして利用され現在では唯一の渡しとなりました。

この矢切の渡しの庶民性と矢切の里の素朴な風景は千葉県の生んだ歌人でもあり小説家でもある伊藤左千夫の小説「野菊の墓」の淡

い恋物語の背景となっており、その小説の中で美しく描かれています。

船に乗るときはゆれが少しこわかったです。ゆっくりと船が進みだします。岩には小さなかにかいて川にはアメコボがいました。ゆっくりと進み、少しふく風がここちよいです。でも、川がきたないのが残念です。川に手を入れてみたかゝたのですが、きたないのでやめました。柴又の方で降りず、往復しました。途行より帰りの方が速く、すぐ着きました。途

中であわが見えました。船頭さんの話によると、魚がいるようです。

私は矢切の渡しに行つて、とても楽しかったです。ゆっくりに進む船、ここちよい風がとても落ち着きます。でも、川がきたないのが残念でした。